



「大きな変化の中を生きる子どもたちのために」

前橋市教育委員会教育長 吉川 真由美

毎朝、我が家の前を歩いて近くの駐車場に向かう親子がいます。「あ、お花が咲いているよ。」「きれいねえ。」など、他愛のない親子の会話にほっとします。しかし1年前までは、「早く!」「お願い、ちゃんと歩いて!」とお母さんのほうが泣きそうになりながら、手を引っ張っている様子が、家の中からもはっきりと分かりました。そのたびに、「お母さん頑張れ!頑張れ!」と応援していました。

ある日、このお母さんに「いい子育てしていますね。」と声をかけてみました。幼児教育の専門家でもない、他人が言うのは、無責任かもしれません。そもそも、何をもって「いい子育て」というのか。私にも分かりません。でも、お母さんは一瞬で笑顔になりました。「よく頑張りますね。」「大丈夫、大丈夫!」と、その後もお母さんに声をかけました。

実はこの言葉、義母からかけてもらった言葉でした。義母とは離れて暮らしているので、私の日頃の子育てを知っていたわけではありません。ましてや、子どもの言動をみれば言いたいことは山ほどあったはずですが、でも、私の欠点も、育児の足らない部分も分かったうえで、いつもこう声をかけてくれました。「いい子育てしてるわね。大丈夫、大丈夫!」と。無条件に繰り返されたこの言葉に、私は救われました。

コロナウィルス感染症への対応で、社会は大きく変わろうとしています。働き方も、生活様式も変化を余儀なくされ、20年先の社会はおろか、3年先でさえ、見通せなくなりつつあります。たくさんスキルを身に付けても、身に付けたスキルがすぐに「古典」になってしまうことが多い状況だからこそ、今後、より本質的な「生きる力」が求められてくると感じます。

特に、どんな環境に置かれても、物事を主体的に捉え、「きっとなんとかできるぞ」という子どもの自己肯定感、社会の大きな原動力になります。子どもの「できた!」と一緒に喜びながら、結果ではなく、挑戦したことそのものを認めて、育む。毎日が新しい挑戦の連続である幼児期ほど、自己肯定感の形成に一番大切な時期と思えてなりません。一方で、この時期、親としては、どうしても「できた」「できない」に焦点をあてて、自分の子育てが期待する結果につながらないことで不安や苛立ちを感じてしまいがちです。親の自己肯定感の高低も子どもに大きく影響します。親が気付きにくい小さな成長や努力を伝えて、親が自信をもって子育てができるよう「子どもの育ち」と「親育ち」のよい循環を作ることも私たちの役目だと思います。

どんなにICTの技術が進んでも、人を育み、成長させるのは人。けんかも、遊びも、すべてを大事な栄養素として成長する子どもたち。その子どもたちを支えるみなさんと、しっかりとつながり、スクラムを組んでいきたいと思っています。